

米欧回覧

第17号
編集・発行
米欧回覧の会
事務局

ピーター・フェチコ氏を迎えて・・・
第十五回例会「日米交流のあけぼのと岩倉使節団」

大いに盛り上がる！



第十五回例会は国際交流部会担当により、十月三十日（土）午後一時より場所を両国の江戸東京博物館に移して行われた。さわやかな快晴にも恵まれ、参加者は七十数名に達した。会の進行は昼夜二部構成で

浅沼氏の総合司会並に山田氏の司会兼通訳で行われた。まず昼の「まじめの部」では、最初に特別展「日米交流のあけぼの展―黒船来航―」を福島正和氏（トータルメディア研究所チーフディレクター）の解説付きで見学し、二時から五時までは会議室でピーター・フェチコ氏（セーラムのピーデー・エセックス博物館学芸部長）、小林淳一氏（江戸東京博物館学芸員）並びに泉三郎氏の三者によるリレートークがおこなわれた。



はじめにフェチコ氏より、日米の交流が黒船来航より半世紀も早くボストン郊外の小さな港町セーラムから始まっていたことの紹介があり、その記念すべきフランクリン号の絵図やその時長崎から持ち

帰った数々の品物がスライドで映し出された。次いで小林氏よりベリーの黒船時代、万延元年の新見使節などの話があり、当時の絵入り新聞や主な展示物がスライドにより映写され、その一つ一つについて専門家ならではの極めて興味ある解説があった。



また、二部の「お遊びの部」には三十六名が参加、五時半から隅田川に浮かぶ屋形船に席を移して、江戸情緒にひたりながら飲み放題、ダベリ放題の船上宴会となった。レインボーブリッジ界隈にくると席も乱れてカラオケ大好き人間が大活躍、浅沼氏がセーラムに因んで「マサチューセッツ」を歌えば、女性コーラスが「春のうららの隅田川」を歌い、マダムフェチコが興にのって「枯れ葉」を歌えば、泉氏も調子にのって「思い出のサンフランシスコ」を披露する有様で、期せずして日米交流歌合戦とあいなつた。

岩倉使節団から百三十年、日米関係は密月時代と摩擦時代を繰り返してきたといえましょう。明治維新より四十年、日露戦争の講和にいたるまではいわば密月時代でした。それがおかしくなるのは日本が大国の仲間入りをして米国の目障りになる存在となり、中国を舞台に覇権を争う関係になつてからでしょう。

当時、朝河貫一氏は「日本の「禍機」を書いて「日本が傍若無人に中国での權益を拡大しようとする」とことに警鐘を鳴らしましたが、両国はその後十五年にわたつて危機を増幅させ日米戦争に突入していきます。

さて、太平洋戦争後の日本はどうでしょうか。民主憲法を戴き、戦争を放棄し、経済一辺倒に突き進みました。その結果として経済力が強大になりアメリカを各処で脅かすようになり、貿易摩擦の季節を迎えました。

そして戦後四十年の一九八五年には円高誘導という形で金融摩擦に発展します。さらにいまやそれは文化衝突にまでエスカレートしてきているとさえいえます。とすれば「日本の禍機」が再び形を変えて襲来したと解釈すべきでしょうか。

現未来部会のパールハーバーデーの議論が期待されます。

日米交流のあけぼの

岩倉使節団

(三氏による)
リレートークの抄録)

日米交流のあけぼの
— 港町セーラムと

全米最古の博物館
ピーター・フェチコ氏



ボストンの北十七マイルにあるセーラムは、1800年前後には造船と貿易で繁栄した華やかな港町だった。そして、そこには東インド海運協会が設立され、外洋船が運んできた海外情報のセンター的存在になった。そしてそこに集積された海外の資料や物品が元になり、全米でも最古の博物館、ピーボディ・エセツクス博物館がつけられた。今年設立200年を迎えることになり、それを記念しての江

戸東京博物館での展覧会となった。

このセーラムで造られた帆船が、実は1799年にこの港から出港して長崎にたどり着き、日本から最初の交易品を持ちかえった。鎖国時代に何故、アメリカの船が長崎に入れたのかといえば、フランス革命の余波でオランダが直接日本へ航海することが出来なくなり、当時中立国だったアメリカの船をチャーターすることになったからである。

また、その後の日米交流は、1820〜50年代に盛んになる太平洋捕鯨の時代に、厳重な鎖国の下で細々と行われた。漂流民が捕鯨船で救われたのもこの時代であり、ジョン万次郎もその一人だった。

ペリー来航と万延遣米使節

— 絵図や物品に見る日米交流
小林 淳一氏

1853年、いよいよペリーがやってきて、正式に日米交流が始まる。1860年には新見使節が日本人として始めて公式に米国を訪問する。こうして日米の交流は本格化し、お互いの理解度もすすんでいく。
ここで面白いのは、このよ



うな日米交流の過程で日本人や米国人のイメージがどのように変遷していったかである。それは当時の絵や航海記などから伺い知ることができ、それを小林氏はスライドで紹介しながら解説された。それによると、初期のものでは日本人はまるで中国人かインド人かアラブ人かわからない姿で伝えられており、それが時代をおうごとに日本人らしくなってくる。とくにその面で重要なのはシーボルトの著書「日本」の挿画であり、その原画は日本の絵師川原慶賀によるもので、それによって日本人の姿がかなり正確に伝えられるようになった。また、アメリカ人の注文によって漆塗りの鏡台や食器入れなどが造られており、セーラム時代に既に日米合作、文化融合が行われていることがわかる。

各分科会

活動だより

歴史グループ

TEL&FAX.03-3717-5576(自宅)
kenhanza@ba2.so-net.ne.jp
TEL.03-3717-5576(自宅)
メールは三十人に近づきました。

探し求めた「近代日本」はどのように結実したのか、その選択はどうだったのか。この視点で討論を続けています。今回は二月上旬を予定しています。兆民の「三酔人経論問答」、「漱石文明論集」などがテキストの候補になっています。

現未来グループ

連絡 郡山史郎
TEL.03-3492-8553 FAX.03-3492-8144
次回は、「日米関係」について十二月七日(火)6PMから9PMに国際文化会館でイベントします。奮って御参加下さい。このグループは、各自の日常の行動に、勇気と自

信を与えるような対話の機会を提供することを目的としています。その甲斐あって、グループのメンバーの中には、それぞれの立場から世直し活動を積極的に行っておられる方も沢山おられます。また、そのような方々の憩いのサロンとしても活用いただきたいと思っています。FAX・手紙・E-mail等で御意見を賜りましたら、会員に配布等の手続きをとります。どうぞよろしく。

実記グループ

「実記を読む会」は十二月九日(木)で第七回目となる。夏を除いて、月一回、第一又は第二木曜日に開かれる。コメントイーターに水沢周氏(ノンフィクション作家)、泉三郎氏(米欧回覧の会主宰・作家)。あらかじめ決められた箇所をそれぞれが音読し、互いに意見を交わす。途中からの参加者歓迎。時間毎回六時三〇分〜九時三〇分PM。場所は港区南青山七ー二二ー二二〇四。

蒸気船時代と岩倉使節団

泉 三郎氏

本日は、展覧会を拝見した上でフェチコさん、小林さんの貴重なお話を伺うことができ、一八七一年に岩倉使節団が米国を訪れるまでの七十一年の日米交流の歴史を学ぶことが出来て大変有意義でした。

博物館の専門家である両氏の講演を聞いていて強く感じることは、一枚の絵図や一つの物品がいろいろのことを物語っていることへの再認識です。そこからただけのことを読みとることが出来るかは見る方の感性や知識や想像力によるのでしょうか。文字通り「物」は語るものであって、それを聞く耳を持つかどうかのままに問われていることを強く感じました。

そして日米交流のあけぼのがオランダのチャーター船という形でセーラムから始まり、やがて帆船の捕鯨時代に移り、



そして蒸気船時代へと変化していく歴史を眺めていくと、そこにフランス革命、技術革命、産業革命という時代背景があぶりだされてきて興味津々たるものがありました。そして同じ蒸気船時代でも、幕末の軍艦外交時代から明治以降の商船交易時代へと移り変わりもあり、港も長崎から横浜へ、セーラムからボストンへと栄枯盛衰があり、さらにはスエズ運河や大陸横断鉄道の開通によって、世界が大きく変わっていくことも学び取ることができました。また、幕末の遣米使節団と岩倉使節団とを比較してみますと、そこに大きな違いがあることがわかります。消極と積極、受身

と能動、及び腰と本腰、二流の役人と一級の政治家、米国の一ヶ国と米欧十二ヶ国。いずれにしろ岩倉使節団の旅もそうした時代背景と日米交流の歴史の過程で捉えていかななくてはならないと思います。



2001年プロジェクトチーム

連絡 石川直義 TEL&FAX0424-86-2355

2001年には、世界は千年単位のミレニアムを迎え、併せて当会は創立5周年を迎えることでもあり、「米欧回覧実記」全5巻の英訳本が出版される予定であり、それらを記念して何か有意義な事業をやろうと企画中です。尚、本プロジェクトは会の全体事業として行うべきだとの考えから過日、幹事会と合同の会をもち、今後は基本的なプランは幹事会ベースで行い、当グループはその実行委員会的役目を果たすことになりました。さしあたり企画案の作成を急ぎ、資金的な裏付けの必要もあって、一部の財団に接触を始めることにしています。

映像グループ

連絡 岩崎洋三 TEL&FAX03-3488-0532

十月三十一日(日)に一橋大学で、翌十一月一日(月)には青山学院大学の大学祭でダイジエスト版3巻九十分の上映と泉さんの講演の会を行いました。関心の高い方々が集まってくれ相応の成果をあげ

国際交流グループ

連絡 浅沼晴男 TEL.080-596-1589 FAX.0462-75-5634

十五回例会に引き続き、新年懇親パーティーも当グループで担当することになりました。ちょうど「ドイツ年」に当たりますので、それにふさわしい日独交流の趣向を考えています。一月二十二日(土)の夜、銀座七丁目のライオン(ピヤホール)の六階を借り切って賑やかに音楽入りで楽しくやる予定です。いまからご予約下さい。ピアノ、ヴァイオリン、声楽など特技のある方は是非ご披露ください。どうぞお楽しみに。

インターネットグループ

連絡 楠木孝雄 ksnoki@msm.com TEL.043-277-2009 FAX.043-277-2037

「久米邦武がノートパソコンを持ち歩いてMLを使って情報を流したり、ホームページを更新したりしていたら・・・」在米の二人を含め十四人のメンバーがオンラインを中心に活動するインターネット部会です。目下のテーマは「ホームページ」作り。親睦、研究、提言、啓蒙と「回覧の会」が意図するものを明確に伝えるながら、多数派のメンバー会員に参加の場を提供しようという意欲的に取組んでいます。会員、その子女、教え子、知人・・・ホームページの手作り作業に参加していただける方、連絡をお待ちしています。

『米欧回覧の会』ご案内

趣旨 この会は「岩倉使節団」に興味を持ち、その記録である、「米欧回覧実記」に関心を抱く人々の集まりです。

この大いなる旅と「実記」はまさに「温故知新」の宝庫と言えますでしょう。

この素材を媒体にして歴史をふりかえり現代の直面する諸問題についても自由に語りあおうという会です。

会員 上の趣旨に賛同する人なら誰でも入会できます。

例会 年に4回くらい全体例会をもちます。

分科会 テーマ別にグループ活動を行います・映像サロン・勉強会・旅行会・研究会・シンポジウムなど。

機関誌 年に4回程度機関誌を発行し、活動報告や会員の意見発表、情報交換の媒体とします。

幹事 会員の中から、代表1名、幹事十数名を選び、運営を担当します。

会費 年会費5,000円とし、主として通信費および機関誌代に充当します。例会・分科会・講演会などについては、その都度の会費とします。

事務局 当面は『イズミ・オフィス』に置きます。

〒192 八王子市元横山町1-14-16
-0063 TEL0426-46-3310
FAX0426-45-8700

入会申込

氏名・連絡先（自宅或いは勤め先の住所・TEL・FAX）現職&キャリアを事務局までFAXまたは郵便でお送りください。

なお、年会費は郵便振込が便利です。
00180-2-580729

米欧回覧の会

〈催し案内〉

分科会のお申し込み・お問い合わせは
各担当幹事へ

★映像の会（全十巻一挙上映の会）

日時：12月11日（土）10：00～17：00

場所：日本プレスセンタービル10階ホール

テーマ：岩倉使節の世界一周旅行

会費：4000円（弁当、お茶込み）

★第16回例会：新年懇親パーティ

日時：1月22日（土）午後6：30～9：30（開場6：00）

場所：銀座ライオン（七丁目）電話：03-3573-5355

テーマ：ドイツ（日独交流）

会費：8000円

申し込み：改めて通知します

★分科会

●実記を読む会

12月9日（木）96巻を読んだ後忘年会。

1月13日（木）97巻～98巻までお正月気分を
一掃してまじめに勉強の予定。

2月3日（木）99巻～100巻を読む。

3月9日（木）「例言」を読み終えた後5冊完読（ずいぶん飛ばした部分もありますが）を祝う打ち上げ会を予定。

●現未来部会

日時：12月7日（火）18：00～21：00

場所：国際文化会館

テーマ：日米関係をどう考えるか（ディベート）

会費：3000円（夕食代こみ）

★江戸東京博物館

「日米交流のあけぼの展」は、12月12日まで開催されていますから、ご興味のある方は是非お出かけ下さい。

——— 賛助金のお願い ———

このところ新設の分科会もできて会の活動がいよいよ活発になり、併せてニュースも増頁して発行しているため、財政がひっばくしてまいりました。

については幹事会で、この際、有志の方に賛助金のご寄付をお願いすることになりましたので、どうぞよろしくご協力のほど、お願いします。

賛助金は 一口個人一万円、法人三万円です。

* 編集後記

平成十一年十一月十一日、ピンゾロ並びデーには、二六回目の「実記を読む会」が開催されました。当日は「欧羅巴州商業総論」を音読しコメントしあいましたが、久米の東西文化の比較論が目を見事に惹きました。

「ソレ普天ノ下、誰カ富ヲ欲セサラン、然レトモ意思ヲ起コス原点ニ異アリ、富ヲ求ムル目的、自家ノ生活ヲ全クスルニアルト、快美ノ生活ヲ極ムルニアルト、一般ノ風俗上ニ大イナル懸殊ヲナス」

つまり、東洋では、過ぎたるは及ばざる、満つれば欠くるの思想からか、腹八分目で満足するのを知恵と心得えるのに対して、西洋はトコトン快楽を追求してどこまでも貪欲に望みを果たそうとする、そこが大きな違いだという意味であります。

しかも、久米の特徴はどちらがいいとはいわないところです。客観的にそれを併記して判断は読者にまかせようという態度です。ここが「実記」の「実記」たるピンゾロのところが知れませぬ。